

病弱な末妹

貧弱弱者

篠ノ之家には、病弱な末の妹が居た

才能溢れ、しかしその弱さゆえに欠片も活かされない才能を持ち、そして家族に愛された少女のお話

目次

病弱な末妹	1
姉妹の日常	11
末妹の才	21
末妹と少年	33
再会の時とそれから	41
それが淑女の嗜み	59
姉として	71
初めての――	81
やって来たあの子	91

病弱な末妹

「コホッ……コホッ………」

少し暗い和室。埃がほんの少しだけキラキラと空間を彩っており、その中央には一組の布団が敷かれていた。

布団の中に眠るのは、一人の少女だ。

肩口に切り揃えられた黒髪。端正な顔立ちであり、額には白いタオルが乗せられていた。

「コホッ………うう………」

苦しげに顔を歪めた少女は、うっすらと目を開けた。

視界を埋めたのは、見慣れた木目の天井。

「——っ、けほっ！」

何か言おうとしたのだろう、口を開いたがそこから零れたのは乾いた咳だった。彼女の枕元には、水差しとコップ、タオルを濡らすための洗面器等が置かれていて、熱で怠さの残る体では動くこともままならない。

しかし、そんな体に鞭打って、少女はどうかこうにか体を反転させようともがく。

布団の中でどうかこうにか右側へと倒れ、額から温くなったタオルが落ちる。

「うう……………」

そのまま流れで俯せになり、どうかにか体を持ち上げていく。

が、完全に上体が上がる前に両腕が震えて崩れ落ちた。

ポフリ、と質の良い枕が少女の顔を受け止めて、音をたてる。

起き上がろうにも、起き上がれない。

「…………、コホッ！」

どうにか頭を横へと向けて呼吸は確保した、が動いたせいで熱が更に上がっている。

「はーっ…………お…………ねえ…………ちゃん……………」

じわりと瞳が潤む。それは情けなさの涙だった。

少女は、体が弱い。それはもう上二人の姉達に健康という概念を持っていなかったかのように、弱かった。

そんな自分が、嫌い。嫌いで嫌いで堪らない。

自己嫌悪に濡れながら、少女は目を閉じた。その頬を涙が一筋伝う。

「……………」

枕と敷布団を間に挟んでいる耳が、ある音を捉えた。

それは、部屋の外。内縁側の木目が踏み締められる音が聞こえてきたのだ。

足音は真っ直ぐに少女の部屋へと向かってくる。

「^{つなき}繋、起きているか？」

襖を開けて入ってきたのは、長い黒髪をポニーテールに纏めた少女であった。よく見ればその顔立ちには臥せった少女と似ている。

「おね……けほっ！」

「繋！」

繋と呼ばれた少女が、俯せになっていることに気付いたポニーテールの彼女は布団に駆け寄った。そして助け起こすと上下をひっくり返す。

「水を飲もうとしたのか？」

コクリと頷く。

「なら、口を開けろ」

「……………んぐっ……………ありがとう」

「まったく。何でも一人でやる必要はないんだぞ、繫。困ったときには私を呼べ。直ぐに行くからな」

「で、でも……………お姉ちゃんも忙しいかもしれないし……………私なんか……………」

「私なんか等と言うな！」

繫が俯くようにぼやけば、少女は憤慨する。

「体が弱いことは仕方がないだろう？ 繫が悪いわけではないのだから。な？」

「でも……………」

「篠ノ之流は私が継ぐ。これはやらされるから、じゃないんだ。私が継ぎたいと思っただけから継ぐんだぞ？」

「……………」

「泣くんじやない。ほら、眠るまで一緒に居てやるからな」

「うん……………」

小さな返事を返し、繫は目をつぶる。

程無くして、穏やかな寢息が部屋に満ち始めた。

そんな妹の傍らで、双子の姉である箒は体温以上に高い手を握り、横になる。

「お前は、私が守るからな」

病弱で、学校も休みがちな大切な妹。彼女を守るためならば、箒は何だってする。愛情、そして贖罪ゆえに彼女はそうする。

それは言ってしまうえば、彼女の勝手な思い込みでしかない。現に上の姉どころか、両親も繋に甘い。

ただ、箒のそれは双子故の事。

＊

篠ノ之家は神社のみならず、道場も兼任している。それ故に、篠ノ之家の娘達は少なからず剣を修めていた。

「こほっ……けほっ……」

その末娘であり、上の姉二人に健康を持っていかれたような病弱娘である篠ノ之繫しののつなぎ

も一応剣を修めていた。

もつとも、才覚があれどもそれを活かさない病弱ツプリでありあまり意味は無いのだが。

そんな彼女は、今日も今日とて病床に臥せていた。

繫本人からしてみれば、今日は咳が出ているだけで、至って快調——のつもり。だが、周りはそうもいかない。

双子の姉である、箒を筆頭に彼女の家族はとにかく繫に対して過保護であった。繫は、そんな過保護が苦手であったが、同時に好いてもいた。自分が愛されて、そして今ここに確かに居るという現実感を与えてくれるから。

「こほん！……………」

そろそろ布団から抜け出そうかと考えていた繫だったが、そんな彼女の耳がある音を聞き取った。

それは部屋に通じる内縁側の床の木目が軋む音。まるでスキップするかのような軽やかさだ。

障子戸が開かれ、現れるのはメカウサミミ。

「やあやあ！繋ちゃん！この束お姉ちゃんが お見舞いに来てあげたよ！」

「こほっこほっ……お姉ちゃん？」

「あちゃー、今日は喉だったんだ。ごめんね繋ちゃん。話すのも辛いよね？」

「ん、んーん……こほっ！束お姉ちゃんとお話、こほっこほっ！出来て、嬉しい、よ？」

「ふふっ、ありがとう繋ちゃん。お姉ちゃんも繋ちゃんの声が聞けてとっても嬉しいよ！」

繋と箒の姉である、篠ノ之東は万能の天才であり同時に天災であり、コミュ障であつた。

彼女の世界は、最愛の妹たちと親友、そして親友の弟で完結している。両親に関しては、妹関連の繋がりだけで肉親の情も薄かった。

「あつ、そうだ！繋ちゃん！私お手製のお菓があるんだけど、飲んでみる？」

「お菓？」

「そうそう！咳だって熱だって一瞬で治っちゃうんだよ！」

「ほんと……？」

「そう！だから——」

「姉さん？」

束が何かを取り出す前に、部屋にもう一つ別の声が響いた。

声の方向、内縁側に通じる障子戸が開かれており陽の光を背にして立っている筈が居た。胴着姿であり、どうやら今の今まで剣道に打ち込んできたらしい。

「繫に何を飲ませようとしているんですか？」

「え、えっと筈ちゃん？これは、その……」

「繫の体を心配しているのは、分かります。けれど、薬を試すなんて……」

「ちゃ、ちゃんとマウス実験クリアしたよ！それに、私の体でも確認したし——

——

「ダ・メ・で・す！繫は体が弱いんですよ！」

凄い剣幕の筈に、束も引き下がるしかない。

力関係は明確ではないが、少なくともこの場では束よりも筈の方が強かった。補足すると、どちらも繫が大切であるがゆえの衝突だ。

筈としては、只でさえ体の弱い繫に不明瞭な薬を使いたくない。

束としては、繋がり少しでも外で遊べるようになれば、という姉心からだ。

「——ふふっ」

睨み合う、というよりも一方的に箒が睨んで、束がしょんぼりしているこの状況で布団の方から声が漏れた。

見れば、布団の中で実に楽しそうな繋がり口許を押さえて笑っているではないか。

「ふふふふっ……けほっこほっ！」

「繋がり！大丈夫か？」

「う、うん……こほっ。お姉ちゃん達が仲が良くて、けほっ、嬉しい、だけだから」
咳を間に挟みながら、微笑む末妹に姉二人は愛が抑えきれない。

「繋がり（ちゃん）!!」

「わっ！お、お姉ちゃん達、い、痛いよ？こほっ！」

困ったような声をあげた繋がりだったが、直ぐに二人の姉の背中に手を回した。
大好きな姉達。そんな彼女らとの時間が幸せであったことは確かだった。

姉妹の日常

篠ノ之流剣術。篠ノ之柳韻が師となって剣術道場を開いている。

もっとも内容は、剣術ではなく剣道であり、多くの門下を抱えてもいたのだが。

「なあ、箒」

「ん？何だ、一夏。私は今日は暇ではないと、昨日言わなかったか？」

「あ、いや、道場は開いてるんだよな？」

「ああ。だが、今日は私は稽古には出ないがな」

「そうなのか？」

「すまないが、もう帰るぞ。私は暇ではないんだ」

小学校低学年とは思えない言葉遣いの箒は、手際よく荷物をランドセルへと詰め込んでさっさと教室を出ていってしまう。

そんな友人の背を見送り、織斑一夏は面白くない思いを抱いていた。

彼女、箒は自分と同じ道場の門下生でありそして自分よりも強い剣士であった。だが、男と女。負けるのが悔しいのもあるが、何より女子の背中に守られるのは

面白くない。

だからこそ、道場に通う度に手合わせを申し込んでいた。

しかし、時折こうして突発的に箒は一夏の相手をしてくれなくなる。

面白くない。少し不貞腐れ、一夏は帰りの用意をし——ふと、視線を外してあるものを見付ける。

「箒？」

それは先ほど彼を見事にフツて先ほど慌ただしく教室を出た少女の姿。

そんな彼女のとなりに顔立ちの似た大人しそうなショートカットの少女が居た。箒は、少女に対して今まで見たことも無いような優しい笑みを浮かべて彼女の手を引き帰路に着く。

何故だか少年の胸の内には、しこりが残るのであった。

＊

病弱少女、篠ノ之繫しののつなぎは小学校ではレアアニマルと化していた。

その原因は、体の弱さ。彼女は基本的には保健室登校で、教室に向かうのは余程体調が良いとき。送り迎えは両親が行っていた。

だが、時折両親が迎えに来れない事がある。その際には、東が迎えに来るか、若しくは箒が付き添って一緒に帰ることになっていた。割合的には後者が多い。

「お姉ちゃん、今日は稽古は……」

「心配するな。一日やそこで弛むような鍛練はしてきていないからな」

「……ごめんね、お姉ちゃん。私をもっと体が——むぎゅっ！」

「それは言わない約束だろう、繫。お前は私の大切な妹なんだ」

右手と左手。繫がれた互いの温かさが行き来する感触を味わいながら、箒は妹の言葉を否定した。彼女のフワリと柔らかない頬を左手で摘まみながらだ。

「で、でふおも……」

「でも、じゃない！」

「むう……ごふめんなふあい」

「よし。じゃあ、帰ろうか。手を洗ってうがいをして、宿題を終えたらおやつを食べよう。繫の好きな和菓子を母さんが用意してくれている筈だからな」

「うん」

双子の姉妹。しかし、似て非なる二人の日常風景。

自分の体の弱さから、常にマイナス思考が強めの繋とそんな彼女を引っ張り気張る筈。

バランスのいい二人である。

更に、繋はインドアであり、筈はアウトドア。

基本的に外に出られない繋は、頭脳労働に強く学業成績も学校トップだ。

対して筈は、剣道をしているお陰かかなりの身体能力を誇る。

これもまた双子ゆえにか、お互いの欠点を補う形となっているのは面白い。

そんな二人を見つめる目に、双子はついで気付かなかった。

＊

ソワソワしている。織斑千冬は、親友を見ながらそんな感想を持った。

彼女の親友、マッドにして天災にして天才である少女、篠ノ之東は基本的に人付

き合いが希薄に希薄を掛け合わせて、更に希薄をぶちこんだレベルで希薄である。その反動からか、彼女は身内と定めた者達には恐ろしく甘かった。それはもう、甘えて甘やかして、グラブジャムンよりも甘い。

そして頭のウサミミが表すように、四六時中彼女は千冬にベッタリであることが基本だった。

だが、今日は違う。朝顔を会わせて登校したその時から束はずっとソワソワしていた。

何より、いつもにも増して彼女は周りへの隔壁のような心の壁をマシマシで増設していたりする。

具体的には、凡そ五分に一回のペースで時計を睨み、進みの遅さに舌打ちして、机を指先で叩きまくるのだ。声をかけるところか、ぶっちゃけ側にも近寄りたくない。

「……………」

そんな中で、千冬には少なくとも視線が生徒のみならず教師からも向けられていた。

学校では、彼女のみが恐らく唯一束との完璧なコミュニケーションを行える人材であるからだ。

「……あー、束？」

「んー？ なーに、ちーちゃん。ちょっと今の束さんはご機嫌ななめさんだから、無事は保証しないよ？」

「何をそこまでソワソワしているんだ？」

「えっとねえ……ちーちゃんには、私に妹が居るの知ってるよね？」

「箒のことか？」

「違う違う。箒ちゃんも束さんの大切に大好きな妹だけでもう一人居るんだよ」

「もう一人？ ……ああ、体が弱い妹、だったか？ 道場には来ていなかったな」

「そうそう！ 繋ちゃんって言うんだけど、可愛いんだよ！」

「そ、そうか……」

不機嫌な様子から一転、束は千冬に詰め寄ると如何に己の妹が可愛らしいかを懇切丁寧に語り始めた。

それはもう、実際に顔を会わせたことが無いというのに篠ノ之繫という少女を事細かに語れそうなほどに語られた。

「——それでね！今日は繫ちゃんの体調も良くて、学校なんて無ければ東さんが迎えに行くのにさ！」

「……………そう言えば、学校をサボったことはなかったな」

「まあ、ね。繫ちゃんに言われちゃったんだ『東お姉ちゃんは学校に行けて羨ましい』ってね。学校なんてどうでもいいんだよ。けど、繫ちゃんが羨ましいって言ったことだし、ね？」

「そうか……………」

「東さんもうにかしてあげたいんだけどねえ……………試葉なんて出来ないし。はあ……繫ちゃんと箒ちゃんに会いたいなあ」

常の態度はどうであれ、東は美人だ。憂いのため息をつく姿は絵になる。

それは親友の千冬を持ってして、見蕩れてしまうエロスがあった。

「……………っ、んんっ！ならば、東今日は道場は開いていないのか？」

「んー？たぶん、開いてるんじゃない？私は興味ないし。あ、でも箒ちゃんも私

も繋ちゃんに付きつきりだから、その辺はよろしくね」

「……………そう言えば、時々箒は稽古に出てこなかったが…………つまり、妹に構っていた、と？」

「そうだね。繋ちゃんの体調がいいときは珍しいし、近くで見えないと無理しちゃう子だから」

「剣道もするのか？」

「んーん、繋ちゃんはそんな危ないことしないよ——天才だけだね」

「なんだと？」

千冬は思わず聞き返す。身内鼻肩を差し引いても、束が天才と称するのだ。珍しいどころか、天変地異の前触れではなからうか。

「天才だよ、繋ちゃんは。見ただけで何でも出来るんだからね。まあ、それが活かされるなんてまず無いんだけど」

「どういう意味だ？」

「繋ちゃんは、体が弱いって言ったよね？どんなことでも出来る才能があっても、それを使いこなせる体が無いってこと」

スペック

それは、どうしようもないこと。それこそ神様が繋という少女の活躍を縛るために与えたと思わされるほどに、彼女の体は貧弱だった。

「けど、それで良いんだよね」

「なに？」

「繋ちゃんは弱くても良いんだよ。あの子は寂しがりやだからね。一人の世界なんて耐えられないよ」

その世界を知るからこそ、束は最愛の妹である二人にその道へと進んでほしくはない。

だからこそ、繋の病弱は都合が良かった。これにより、才覚でドンドン進むこともなく、そして箒に劣等感を抱かせることもない。

むしろ明確な弱味があることにより、箒はより一層の努力をしてきた。

偏に、強くも弱い妹を守るために。

「…………お前は、止まらないのか？」

「止まらないよ。だって繋ちゃんと約束したからね。あの子は自分が理由になって私や箒ちゃんの道を閉ざす方が怖いんだよ」

天災は人の手では止められない。止められないからこそ、“天の災い”であるのだから。

末妹の才

篠ノ之箒にとって、妹である繫は守るべき存在であると同時に憧れを抱く相手でもあった。

庇護は病弱さに、憧れはその才覚に。

「お姉ちゃん、私は自分で食べられるよ？」

「ふっ、気にするな。ほら、あーんだ」

和室の居間にて、テーブルの一边に並んで座った繫と箒の双子は、手洗いうがい
を模範のように綺麗にこなして、宿題を手早く済ませておやつと洒落込んでいた。
今日のおやつは、羊羹。水羊羹のように柔らかい物ではなく、回りを砂糖で固め
たアレである。

一人二切れずつなのだが、先程から箒は繫に“あーん”ばかりしていた。
繫としても、何度か断ろうとするのだが姉の圧力には屈するしかない。

「美味しいか？」

「ん？ おい^{おい}ふい^いい^いよ^よ？」

「そうか」

もつきゅもつきゅと羊羹を頬張った繋を、箒は優しい表情で眺めていた。
この時間が彼女は好きなのだ。

「ほら、他にも……………む？」

更に一口羊羹を差し出そうとしたところで、箒が気付く。

足音が近づいてきていた。

「つーなぎちやーん！束お姉ちゃんが帰って——へぶっ!!」

「姉さん。手洗いうがいをしてから出直してきてください」

「うう……痛いよ、箒ちゃん。お姉ちゃんの顔にお盆ぶつけるなんて」

「何を甘いこと言っているんですか！繋が風邪を引いたらどう落とし前をつけるんです!!」

居間に突撃してきた束を撃退する箒。

「うー、だ、大丈夫だよ箒ちゃん。私の体は汚く——」

「手・あ・ら・い・う・が・い！です！」

「うわあ~~~~~ん！箒ちゃんが苛めるよ~~~~~！」

半ば泣きながら、洗面所へと駆けていく束を見送り、箒は膝立ちとなった体勢から、繋の隣へと腰を下ろす。

「全く、姉さんは——」

そのままぶつぶつとぼやく箒。

「こんにちは」

「あ、ああ。こんにちは」

一方で、繋は姉が連れてきた友人に挨拶していた。

「初めまして、ですよね？ 篠ノ之繋です」

「そう、だな……私は織斑千冬だ」

「！ 貴女が、ちーちゃんさんですね。お姉ちゃんから色々と聞いていますよ」

「……………因みに、聞いてもいいだろうか？」

「えっと、美人で強い人だ、と。あ、あとブラコン？ というものだと聞きました」

「ほう、そうか……………」

部屋の温度が下がった。プルリと震えた繋は首をかしげる。

「ど、どうした繋！ まさか、風邪か？」

「え？だ、大丈夫だよ？」

「本当だろうな？少し額を出せ」

震えた繫を、目敏く見咎めた箒は妹の言葉を聞く前に額と額をくつつけた。

「……………熱は、無いな。喉は痛くないか？」

「うん」

「目眩は？頭痛や吐き気はどうだ？」

「何ともないよ。お姉ちゃんは心配しすぎ」

「そんなことはない！お前は直ぐに無理をするんだ。心配のし過ぎは、無い」
繫の無茶を、箒は何度も見てきた。

その全てが、家族に迷惑を掛けたくないという妹の我が儘から。

結果、風邪を拗らせて肺炎一步手前まで行き入院と相成った。

「箒ちゃん！手洗ってきたよ！」

そんな心配な状況に割り込んできた束。

「あれ？繫ちゃん、具合悪いの？」

「んーん、大丈夫だよ束お姉ちゃん」

「本当に？本当に大丈夫？」

「大丈夫だってば。お姉ちゃん達、心配し過ぎ——」

だよ、と続ける前に

「千冬姉えー！」

横合いからの声に驚いてしまう繫。

「っ！げほっ！えほっ！えほっ！」

「繫！」

焦ったのは筈だ。直ぐ様、咳き込む繫の背を軽く叩き、擦る。

「一夏！人様の家で騒ぐんじゃない！」

さすがに、酷く噎せ込む少女の姿を見てブラコンの千冬も弟に厳しい言葉をかける。

「ちーちゃんも声おっきいけどね。大丈夫？繫ちゃん」

「ごほっ！………んんっ、だ、大丈夫大丈夫。ちょっとビックリしただけだから」

「一夏！繫が具合を悪くしたらどうするつもりだ！」

「あ、えっと………ごめん」

物凄い剣幕の箒に、駆け込んできた胴着姿の一夏は素直に謝った。

彼としては、そろそろ稽古が始まるため千冬を呼びに來ただけであつたのだが、あそこまで酷く噎せられると罪悪感が湧くというもの。

「けほっ……織斑、一夏君？」

「あ、え？」

「私、篠ノ之繋つて言うの。お姉ちゃん達がよく話してたから会いたいって思ってたんだよ」

よろしくね、と微笑む繋に一夏は一瞬目を見開いて顔をそらす。

「よ、よろしく……」

今まで、一夏の周りに居なかつた病弱な女の子。

その儚さが彼に刺さつた。

だが、この場に居るのは己の妹以外の機微に疎い箒と、基本的に他人へは構うばかりの束。

そして恋愛経験皆無の千冬と、対人スキルがショボい繋しか居ないために彼の変化には、彼自身も気づけなかつた。

「で、一夏君？千冬さんを呼びに来たの？」

「え、あ、まあ、な。これから稽古だし……」

「剣道の？」

「お、おう！」

様子がおかしい一夏だが、質問した当人はそこには気付かない。

「剣道……」

「興味があるか？」

「……んーん、大丈夫だよお姉ちゃん。お父さんの邪魔、したくないもん」

繫は、今まで一度も竹刀を握ったことがない。それどころか、道場にも立ち入ったことが記憶に無かった。

因みに、記憶に無いだけで繫は赤ん坊の頃道場に連れていかれたことがあり、その際に母の腕の中でリバースしていたりする。

若干沈んでしまった空気。これに慌てたのが、繫だった。

「あっ、べ、別にお姉ちゃん達に何かある訳じゃないんだよ？だから、その、ええっと………！」

ワタワタと両手を振るって慌てる妹の姿に、姉二人は色んな意味で堪らない。

「ちーちゃん！いっくん！繋ちゃんに剣道を見せてあげて！」

「行くぞ、一夏！手合わせだ！」

「た、束さん？ 箒？ 急に——」

「早く——！」

鬼気迫る表情で詰め寄られた一夏は、半ば涙目だ。

「……………はあ」

眉間に手をやり、千冬のため息が儼く流れる。

＊

篠ノ之家の三姉妹。長女は、天災であり天才。次女は、剣鬼に至れる天才。
そして三女はというと、

「——隙あり」

紛れもない、天才にして完成品であった。

篠ノ之流劍術には、一刀一扇の構えと呼ばれるものがある。

右手に刀、左手に扇。神社で行われる神樂にも盛り込まれたこの構えは、流麗にきて華美。

そんな構えに使われる扇が、今まさに一夏の首筋に向けられていた。

扇を持つのは、体格と筋力的に真剣どころか竹刀の短いものすら持てない繋だ。

「……………束、どういうことだ？」

「なにがー？」

「アイツは、繋は剣道をしたことはないんだろう？」

「そうだね。というか道場には基本的に来ないし」

「つまり、剣道と剣術に触れたのも今日が初めてという事だな？」

「そうなるね」

「……………お前もそうだが、姉妹揃っておかしいな」

千冬が頭を抱えるのも無理はない。

繋が道場に來たのは、三十分ほど前。最初は、風通しがいい日陰で見学をしていたのだ。

そこで、父である柳韻が声をかけた。その際に、繫がマトモに両手でも竹刀を振れないことが判明するのだが、問題はその後。

なんと彼女、父や姉の扇子の動きを見ただけで体得してしまった。

更に、一夏との手合わせで竹刀と扇子というリーチの差すら考慮すること無く勝ってみせた。

「スゴいぞ、繫！やっぱりお前は天才だな！」

「あ、お姉ちゃん……………こほっ、けほっ……………！」

駆け寄ってきた箒に対応する繫だったが、その直後に咳をしながらその場に座り込んでしまう。

動いた時間は素振り含めて五分と少し。たったそれだけの時間であったが、繫の体にはダメージがいつてしまったようだ。

「こほっ！……………ん、だ、大丈夫……………ちょっと疲れちゃっただけだから……………」

「大丈夫、じゃないな？直ぐに部屋に戻ろう」

「やだ」

「やだ、じゃない。このまま風邪を引いたらどうする？」

「だって、お姉ちゃん達の剣道、まだ見てないもん」

「ぐぬ……見たら直ぐに部屋に行くからな？」

妹の我が儘に弱い箒は、竹刀を片手に振り返る。

「というわけだ、一夏。本気で来い。そして、繋に剣道の素晴らしさを教えるぞ!!」

正に血氣盛ん。そして、一夏は完全にとぼちりだ。

この後、彼は箒にフルボッコで負けて一時期剣を置こうとするレベルで己の腕に疑いの目を向けることになるのだが、全くの余談である。

末妹と少年

織斑一夏にとって、篠ノ之繋という少女は、よく分からないというのが本音だった。

彼女の双子の姉である篝や、その上の束などは繋を溺愛しており、それこそ暇さえあれば四六時中べったりだ。

初めて出会ったのは、道場の奥にある母屋に突撃したときの事。

肩口で切り揃えられた、今まで一夏の周りに居なかったタイプの少女であり、柔らかに微笑むその様子は彼の育ち始めた心に突き刺さる。

病弱だと聞いた時には、幼心に守ってあげなければ、と考えたりもしたのだ。

もっとも、そんな面はその日のうちに彼女自身の手で潰えてしまったのだが。

篠ノ之繋は弱かった。だが、同時に恐ろしいほどに強くもあった。それこそ、彼女よりも長く竹刀を振るってきた一夏が自信を無くす程度には。

だが、折れなかった。扇子一本振るうだけでもへたり込んでしまう彼女を見た時、折れている場合ではないと思ってしまったから。

それから、我武者羅に竹刀を振るった。体を鍛えた。勉強だって今まで以上の熱意をもって取り組んだし、手洗いうがいの衛生面のみならず、家事なども身にかけていった。

それは偏に、強くも弱い少女を守りたかったから。

いつしか、性別の成長度合いも手伝って箒にも五回に一回辛うじて勝てるようになってきたころ、彼はその胸のうちに抱いた気持ちが無なのか誰に言われるまでも無く、自覚していた。

だが、その気持ちを表に出す前に、世界を揺るがす大事件が起きる。

白騎士事件

ISが世界に広がる切っ掛けとなり、女尊男卑という風潮を生む切っ掛けともなったこの事件。

そしてそれは、一夏にも大きな事件となるのだった。

＊

「それじゃあ、元気でね一夏君。風邪、引かないでね？」

「……………おう」

小学校四年生のその日、姉である篠ノ之束が起こした一件により篠ノ之家は国家に保護され、一家離散の憂き目となっていた。

ただ、末妹である繫は体が弱い事もあり、精神的な面も顧みて姉である筈と一緒に引っ越すことになったのだ。

そして今日、夕暮れの篠ノ之神社鳥居の前で彼女は一夏と最後の挨拶となっている。

「俺も風邪ひかないから、繫も病気になるよ？」

「ふふっ、そうだね。私も、一夏君ともう一回会うのが病院のベッドなんて嫌だもん」

女性へと変わり始め、身長伸びた繫は上品に微笑むようになった。

揺れる肩口で整えられた黒髪に、白魚のような指。小学生でありながら、既に妖艶さすらも感じさせる彼女を前に、一夏の頬には朱が差した。

もう二度と会えないかもしれない。だがそれでも、約束の為に彼はその胸の内を

彼女へと明かす事は出来ない。

「なあ、繫」

「なあに？」

「えっと、その………もしも、何だけど。俺がその………」

「うん」

「け、剣道で優勝したら………！」

「優勝したら？」

「ッ、と、とにかく優勝するから！その時話す！」

それじゃ！と彼は踵を返すと走り去ってしまった。

小さくなっていくその背中。繫は首を傾げて見送るしかなく小さく手を振るのみ。

勘が良くなくとも気づきそうなものだが、彼女の周りはそれを良しとしなかったのだ。結果として、繫は鈍く育ってきた。

深窓の令嬢のようで、優しく笑顔で接する彼女のファンは多い。中学生が近づき思春期の少年たちにとって彼女はとても魅力的だった。

告白しようとしたサツカー少年や少年野球のキャプテンなど居たのだが、その都度、彼女の恐るべき姉である箒が現れ叩きのめしていくのだ。

曰く、私に勝てない軟弱物は許さない、らしい。

それは一夏も同じこと。彼の場合は、箒に勝ち越せるようになれば告白を許可する、というものであったのだが結局この日まで達成する事は無かった。

一夏とて、それは悔しいと思っている。だが同時に、繋の弱さを知っているため強くありたいと願う彼は、より修練に励んできた。

「別れは、済んだか？」

「あ、お姉ちゃん。うん、ちゃんと言えた、かな？」

鳥居をくぐった繋を待っていた箒は、妹の変化の無さに、彼が告白しなかったことを悟る。

自分で言った手前、その件に関して何かを言う事は無いがてつきりその場の勢いで告白してしまうかと思っていたのだ。ついでに、引越し前にそんな事すればしばらくつもりでもあったが。

何せ、間違いない繋が寝込むことになる。主に、心労によって。

そんな事になれば、箒は冷静ではいられないだろう。真剣引っ提げて、その首を刎ねかねない。

「寂しいか？」

「……………少し。でも、お姉ちゃんと一緒だから大丈夫だよ」

「そうか……………姉さんは、嫌いか？」

「全然。東お姉ちゃんの夢だったでしょ、ISって。私は嬉しいな。お姉ちゃんの夢が叶って」

「……………」

「だから、お姉ちゃんもそんな怖い顔しないで、ね？」

「……………ああ、分かっているさ。お前の事は、私が確り守ってやるからな、繋」

「ありがとう、お姉ちゃん」

微笑む妹を抱き寄せ、姉は誓う。

例え、目の前に万の、億の、兆の、京の壁が立ちふさがろうともその尽くを切り捨てて見せる、と。

＊

五年後。白騎士事件以来の衝撃が世界を襲う。

世界初の男性操縦者、発見。

この見出しが世界中の新聞の見出しを飾ったのだ。

更に、その見つかった男性操縦者というのが世界最強ブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬の弟であるのだから、その衝撃はさらに強まる。

彼は、IS学園へと強制的に放り込まれることになった。

周りは女子ばかり。98パーセント女子だ。リアルハーレム以前にメンタルがブレイクしかねない。

彼女を見つけるまでは。

「——よ、よう、久しぶり」

「うん、久しぶり——」
「夏君」

再会の時とそれから

朝の時間は、余裕を持つことが肝要だ。

「お姉ちゃん。髪跳ねてるよ？」

「む？」

「ほらここ。ちょっと待ってて」

揃いの白い制服に身を包んだ目鼻立ちの似た二人の少女は、とある一室にて朝の準備に勤しんでいた。

ポニーテールにしても腰ほどまである黒髪の姉、篠ノ之箒は今気づいたとでも言うように己の髪をなでる。

確かに、比較的真っ直ぐな髪にはうねりがあり跳ねが目立った。

そんな姉に対して、手弱女然とした笑みを浮かべた肩口に黒髪を切り揃えた妹、篠ノ之繫は櫛を片手に洗面所から戻ってくる。

「お姉ちゃんの髪は綺麗なんだから、勿体ないよ？」

「そうは言うが……別段、誰かに見せつけるわけではないのだから問題ないだろう

？」

「今日は入学式だよ？それに、多分一夏君も居るし……………」

「一夏が気になるのか？」

「小学校ぶりだもん。大きくなってると思うし、新鮮、かな」

「……そうか」

「お姉ちゃんは楽しみじゃないの？」

「楽しみ、か……………そう、だな。確かに楽しみかもしれない……………約束も守ったようだしな」

「お姉ちゃん？」

「いや、気にするな。私とて、幼馴染との再会に何も思わないわけではない」

首を傾げる繋に、箒は鏡越しに笑みを返した。

彼女の一歩は、この病弱すぎる妹だ。彼女を守るためならば、修羅にもなる覚悟はとうの昔に決めている事。

過保護と揶揄されようと、幼少の折より、それこそ母の胎内から生まれ落ちたその時より側にいる半身の様な存在なのだ。

しかもその半身は、箒の知る中でも一等体が弱い。

誰よりも才溢れ、姉にも迫れるかもしれないがその全てを病弱さが邪魔をする。何より、彼女は優しかった。

「はい、出来たよお姉ちゃん」

「ああ、ありがとう繋」

＊

IS学園一年一組。

今日この日、入学式を終えた新入生が教室内に集まっているのだが、その中でもこのクラスの注目度は世界トップクラスであろう。

原因は、世界初の男性操縦者にして、ブリュンヒルデの弟、織斑一夏にある。

彼はイケメンだ。それこそ、幼少の頃より引く手数多であったと言えるだろう。

しかし、彼は一度として彼女らの誘いに乗った事は無かった。それどころか、丁重に断りを入れていたほど。

文武両道で、人当たりよく器量よし。家事も万能で、この女尊男卑の世界でも引く手数多な彼の心を射止めているのはたった一人の少女。

（繋、だよな……………？）

最後に見た瞬間のまま美しく成長したであろう、幼馴染の少女へとチラチラ視線を送りながら、一夏は内心で自問自答による回答を模索していた。

心のどこかで期待していたのだ。彼女との再会を。

そして、それは同じクラスという形で果たされた。

話しかけたい気持ちはある。それこそ、この五年間の事をたくさん、たくさん話したい気持ちが彼には有った。

だが同時に、不安もある。

一つは、というかこれが主だが自分の事を覚えていない場合。若しくは覚えていても距離のある話し方をされた場合。

恐らく一夏は、しばらくの間立ち直れない。

そして一つ目の不安を隠れ蓑にした本心の理由は、幼馴染に彼氏が出来ていた場合。

立ち直るとかそれ以前に首を括りかねない。

というのも、彼女のセコムである姉は、自分より強ければ邪魔しないのだ。要するに、姉に勝てれば誰にでもチャンスはあるという事。

姉の強さは知っている。それこそ、今ですらも勝てるかどうか怪しいと一夏は考えていた。

それでも万が一がある。そして、好意を向けられた思い人が答えるか否かは、彼にはどうしようもない次元の話であった。

「……………はあ」

「ほう、ため息とは随分と余裕だな？」

「ッ！ いってえ!？」

どうやらポーっとし過ぎたらしい。小気味良い音を立てて一夏の頭に、堅いものが降ってきた。

「ち、千冬姉——」

「織斑先生だ。惚けるのは構わないが、やるべきことをやってから惚けろ」

「お、おう」

スーツを着こなした大人の女性へと成長した姉、織斑千冬に出席簿で頭に折檻を受けた一夏は、頭頂部を撫でながら頷くしかない。

理不尽な暴力にも見えるが、一夏は一つの事に集中してしまうと視野が狭くなり頭が凝り固まってしまうのだ。こうなると言葉では聞こえないし、仮に聞こえても曲げる事は無い。

その場合、一発衝撃を与えて正気に戻す必要があった。

千冬は世界最強と言われるブリュンヒルデだ。クラス中から歓声が上がった。

とはいえ、自己紹介の時間となっていたのだからそれ以外の話題で騒ぎ続けるわけにもいかない。

千冬が場を収めて、一夏の自己紹介と相成り、そして周りは騒めく。

この状況で彼に向けられるのは、八割の興味と一分の嫌悪。そして一割九分の親愛の感情か。

自己紹介の時間だけで、一時間は過ぎ去り休み時間へ。

そして、一夏は行動を開始した。

「よ、よお、久しぶり、だよな？」

なれない愛想笑いを浮かべて、声が裏返らないように抑えながら、一夏は声を掛ける。

懐かしいという感情が胸の内から湧き上がるが、それ以上に目の前の彼女の魅力とも言えるべきものが彼を捉えて離さない。

「——うん、久しぶりだね、一夏君」

記憶と同じように彼女、繋は一夏へと柔らかな笑顔を向けてくれた。

「あ、ああ、繋、だよな？」

「ふふっ、分かって声を掛けてくれたんじゃないの？」

「いや、その……………」

クスクスと微笑む繋に、一夏は頬を染めるとあたふた視線を彷徨わせた。

そんな彼の肩に、ポンッと手が置かれる。

「久しぶりだな、一夏。早速で悪いが、人の妹に何をしているんだ？」

「ほ、箸……………！」

「試練は終わっていないからな？まだ私にお前は勝ち越していないぞ？」

「分かってるよ」

耳元で囁いてくる箒に、一夏もまた頷く。

中学の剣道大会において、彼は見事優勝を果たした。だが、肝心の箒との勝負は五年前の時点で止まったままだ。

ただ、そんな二人の事情など知る由もない繋はと言うと、

「二人とも仲良しだね。少し、羨ましいな」

どこか寂しそうな気配を滲ませて微笑むばかり。

これに焦ったのは二人の方だ。

「ま、待て、繋！私と一夏には何もないぞ！」

「あ、ああ、そうだ！箒の言う通り！」

「でも、昔からお姉ちゃんと一夏君、よく一緒に居るし……………」

「それは！一夏ぐらいいしか私の相手にならなかったからだ！」

「一夏君も、お姉ちゃんとよく一緒にいたよね？」

「あ、あれは、已むに已まれぬ事情があったというか……………」

どうにか誤解を解こうとする二人。しかし、肝心の理由、即ち繋への一夏の好意を伝えるか否かの話を彼女にするわけにもいかないのもまた事実。

いつも一緒に居たのは、繋への牽制。剣道の試合をよくやっていたのも、同じ理由。

四苦八苦する二人に、繋は「仲が良いな」程度の感想しか抱いてはいない。

男女の中、と想像するには彼女には経験が足りていなかった。寂しそうな気配も仲のいい二人に省かれた気分になっていただけの事。

そんな事は、露ほども思い至らない二人（原因は姉の過保護）は休み時間ぎりぎりまで誤解を解こうと必死に言葉を連ねるのだった。

＊

放課後。教室に残るのは二つの影。

「えっと、ここは……………」

「ここは、こう」

「あ、そっか。ありがとな、繋」

「ううん、高校に入る前に急に勉強してここまで分かってるんだから、一夏君も凄

いよ」

「そ、そうか？」

「うん」

教科書とノートを広げた一夏と、彼の机の近くに椅子を寄せた繫。姉である箒は、剣道部に顔を出さねばならず、かといって病弱な妹を必要以上に連れ回したくないという訳でこうして念入りに一夏に釘を刺して面倒を見させていた。

因みに、手を出せば首と体がサヨナラグッバイ☆することだろう。

「……………」

「ん？どうかした？」

「あ、ああ、いや……」

「ふふっ、今日の一夏君はちょっと変だね。前はもっと率直にポンポン言ってきたのに」

「そう、だったか……………」

「私は、どっちの一夏君も好きだよ。かっこいい君も、真っ直ぐな君も」

「ッ！」

ガンッ、と一夏は机に額を打ち付けた。

目の前で繋がった声を上げているが、彼にしてみればそんな事に今構ってはいられない。

（くう……………！可愛すぎるだろ！）

内心でそんな叫びを上げながらも、表に出すわけにはいかない。彼とて、命は惜しいのだから。

とはいえ、このままという訳にもいかない。

「だ、大丈夫？急に、倒れちゃったけど……………」

「も、問題無いさ。それより、そろそろ部屋に送るぞ？ほら、あんまり遅いと箒も心配するだろうし」

「……………そう、だね……………うん、お姉ちゃんに心配は駆けられないし。けど、一夏君は？家まで帰るの」

「ああ、俺は——」

一夏が説明しようと口を開いていると、唐突に教室の扉が開く。

「あ、織斑君。ここに居たんですね。篠ノ之さんも、こんにちは」

「こんにちは、山田先生。一夏君を探してたんですか？」

「そうなんですよ。こちらをどうぞ、織斑君」

入って来たのは一年一組の副担任を務めている山田真耶。

彼女が差し出すのは、一つのカギだ。

「？これは……………」

「寮のカギだ。お前には、寮の部屋が割り振られているからな」

疑問符を浮かべた一夏の問いに答えたのは、同じく扉から入ってきた千冬。その手にはポストンバッグが一つ。

「携帯の充電器と着替えはこの中だ」

「え？……………え？俺って、家から通うんじゃないのか、千冬姉っでえ!!」

「織斑先生だ。それから、織斑。本当に家から通えると思うのか？」

「一夏君。流石に世界初の男性操縦者を一人で出歩かせるのは、しないし。護衛のコストも考えるところしてIS学園に閉じ込める方が、都合が良いんだよ？それに、千冬さんも居るから」

「と、閉じ込める？」

「おおむね、篠ノ之妹が言うとおりだ。お前はもう少し、有名人であるという認識を持って」

「これも織斑君の為ですから。あと、織斑君はしばらくの間大浴場は使えませんので、部屋のシャワーで我慢してくださいね」

「……………？何ですか？」

「馬鹿者。少しは頭を働かせろ」

「流石に、一夏君。幼稚園生じゃないんだから、男の人と女の人と一緒にのお風呂はいけないと思うよ？」

「…………あ」

苦笑いする繫の指摘を受けて、一夏は漸く思い至ったらしい。

ついでに、彼女に視線を向けた際に頭の中で想像力が働き、少し妄想してしまう。

「……………ッ！」

慌てて顔を反らした一夏。余談だが、繫のプロポーションは箒にも劣らない。更に、彼女のように鍛えていないからか、ふわりと柔らかいのだ。

顔を赤くした一夏に、彼の昔からの思いと気持ちを知っている千冬はため息をつ

き、軽く出席簿をその頭へと落した。

「落ち着け不埒者。とにかく理解したのなら納得しろ。お前の時間も後々工面して作られる予定だ。それまでの我慢だからな」

「わ、分かった……………」

コクリと一夏が頷いたところで二人は教室を出るように促される。

荷物を一まとめにして、教室を出た繋と一夏。その後に担任達も続いて出てくる。「それじゃあ、二人とも。寄り道はしないでくださいね？」

「はっ」

真耶に促され、二人は頷き歩き出す。

＊

寮への道のりは、すぐそこだ。それほど長いわけではない。その道中、

「ふふっ……………」

唐突に繋は笑みをこぼした。

「どうした？」

「ん？ちょっと、ね。ほら、一夏君と帰るのって久しぶりだなんて思って、懐かしくなったの」

あの頃は、お姉ちゃんも居たけど、と続け繋は笑った。

「こうして、一夏君とこんな所で会うなんて思わなかったよ？」

「そりゃ、俺もだよ……………本当に、どうしてこうなったんだか」

「嫌だった？」

「まあ、初めは。だってよ、IS 起動させたと思ったら今度はホテルに軟禁されてたんだぜ？受験もパーだし。やる事と言えば、IS に関する勉強とかぐらいだし」

「そっか……………」

「けど、こうしてここに来なければ繋と再会できなかっただろうし、不幸中の幸いって言うのか、これ」

言わないが一夏自身、期待していなかった訳ではない。むしろ可能性は高いと踏んでも居た。

分が悪い賭けではあったが、それには勝った。後は、

「そ、そう言えば、繫」

「ん？なあに？」

「いや、その………付き合った奴とか、居るのか？」

一番気になる事を聞く。

このタイミングしかなかった。箒も居ないし、周りに人もいない。会話の中身としては、比較的自然だろう。

果たして、

「いないよ？」

一夏の求めた答えが返ってきた。

それは即ち、この五年で箒の試練を突破できた者がいないという事。

そんな彼の内心など知らない繫は続ける。

「私、告白とかされたこともないし。男の子の友達も一夏君しか居なかったから。それにほら、私って体が弱いでしょ？だから、相手にも悪いし………」

それは、彼女の内心で築かれてきた価値観。己の体の弱さを知るからこそその発想。弱弱しく微笑むそんな繫を見て、一夏の胸の内にはどうしようもない愛しさが湧

き上がっていた。

強くも弱い彼女だからこそ、護りたくなる。その足が止まり、数歩前を行った彼女は不思議そうな顔をして立ち止まって振り返る。

「一夏君？」

「ッ、あ、あいな！繋！」

暗くなった通り。外灯に照らされる二人。

「お、俺……！！お前のこ——」

極まった一夏が遂に、

「——一夏？」

言い切る前に、修羅の声。ゾクリと背筋に氷柱でも突っ込まれたような寒気を感じ、一夏の動きは止められた。

声の出どころは彼の後方から。

「あ、お姉ちゃん。お疲れ様」

「ああ、繋。それと、一夏。お前は今、何をしようとしていた？」

「え、あ、いや、その……あの……」

「お前はまだ資格には達していない。その上でのその行動、許すと思うか？」
修羅はその形相を憤怒に染めると、竹刀を構えた。

「折檻だ！大馬鹿者め！」

「ちょ、待——へぶう!？」

夜の空に一夏の呻き声と竹刀の音が響くのであった。

それが淑女の嗜み

悪い意味で、セシリア・オルコットという少女は浮いていた。

入学初日に、興奮していたとはいえ彼女は色々とやらかしてしまったのだ。結果として、入学から四日目というのに友人の一人も作るどころか、仄かな敵意を持たれて近寄れない始末。

朝昼晩の食事もボッチであるし、誰かが声を掛ける事も無い。

どうにかしなければならぬ。しかし、どうする事も出来ないというのが実状。幼少期からの経験から年の近い友人など付き人であり、メイドしかおらず自分から歩み寄る事も無かった。

「……………はあ……………」

居心地の悪い食堂を出て、セシリアは当てもなく歩き回る。

料理が不味いわけじゃない。ただ、遠巻きに囲むようにして見られ続けるのはどれだけ慣れていると言えども限度があるのだ。ましてや、不躰な物ばかりでは辟易してしまう。

カツカツと足音だけが響く廊下。このまま教室へと戻って教科書を見ても良いし、射撃レーンへと出向いて訓練に勤しんでも良いかもしれない。

灰色の青春と呼ばれようとも、自分で選んだ道だと無理矢理言い聞かせて彼女は歩み――

「あら？」

不意に彼女の鼓膜を打つ音。

それは笛の唾抜きをしている様な音であり、彼女の進んでいた廊下。その最奥を右に曲がった曲がり角から聞こえてきていた。

セシリアは思考する。

仮に不審者であれば、専用機を用いればいい。そう判断し、彼女は件の音が聞こえる曲がり角へと歩を進める。

果たして、

「ッ！あ、貴女は……………！」

「ヒュー……………こほっ、けほっ……………？」

曲がり角の先に居たのは、壁に凭れかかりセシリアに背を向けて蹲る少女の背中

であった。

思わずといった様子で駆けよるセシリア。そんな彼女に気付いたのか蹲る少女、篠ノ之繫は少し青白くなった顔を彼女へと向けた。

「こほっ……………オルコット、さん……………」

「はい、私です……………ではなくて！　いったいどうされたんですの?!」

「あ、あはは……………えほっえほっ！　んんっ……………私、ちょっと体が弱いんだ。だから、時々調子が悪くなっちゃって……………で、でも、もう治まるから気にしないで……………」

青白い顔のまま弱弱しく微笑む繫。

事実、彼女の体はちよっと処の話ではなく弱い。

小学生の頃ほどではないとはいえ、体育なども殆ど参加出来てはいないし体を動かさないために最低限の体力しか備わっていない。

ここに居るのは、心配性の姉にこれ以上の心配をかけない為。誰にも見つからないようにこうして外れまでやって来て休んでいるのだ。

「……………」

健気な彼女を前にして、セシリアの胸の内に湧き起こる温かな感情。

むずむずとしてくるような、放っておけないようなそんな感情だ。

「少し、失礼しますわ」

「ッ、オルコット、さん？」

気づけば、セシリアは蹲る繋の側に跪き膝の裏と背中に腕を回していた。

そして立ち上がる。

「ふえ？あ、あの、オルコットさん!？」

「軽いですわね。ちゃんと食べているんですの？」

「え、あ、いや……私、小食で……」

「体が弱いというなら、確りと食べなければいけませんわ！それに、心配をかけたくないというのも分かります！けれど、こんな埃っぽいところに居ては余計に体に悪いんですの！」

繋を横抱きにして曲がり角から出てきたセシリアは、プリプリと怒りながら廊下を進む。

鍛えているとはいえ人一人を軽々と横抱きにする彼女の筋力が高いのか、あるい

は肉付きは姉譲りというのに食べないために繋が軽すぎるのか。

その後、時折こうして繋が横抱きにして移動するセシリアの姿が見られるのだが、その理由を知る者は一部を除いて居なかった。

＊

クラス代表決定戦。

事の発端は、入学式の折りに起きた一悶着であつたのだが、その結果試合ではセシリアの勝ち。だが、勝負の内容としては終始一夏が押ししていた。

「……………」

アリーナのピットに設けられたベンチに腰掛け、壁に背を預けて天井を見上げたセシリアは、流れた汗を流す事も出来ずに呆然としていた。

試合には勝てた。だが、勝負に負けた。その事実を彼女は正しく把握し、理解している。

原因は、明白。彼女の油断と慢心からくるもの。元より理論派で、場を組み立て

て戦うタイプのセシリアが、作戦を立てなかった時点で精神的な驕りがあった事は明白だ。

「ッ……………！」

膝を抱き寄せて、その中へと顔を埋める。

悔しさや、驕っていた自分に腹が立つ。そんなどうしようもない感情が彼女の中では渦巻いていた。

感情の高ぶりは、涙腺を刺激する。しかし、震える少女を慰める者は――

「……………」

「！」

たった一人の少女だけだ。

体のラインが出るISスーツの上から、何やら柔らかく温かなものに包み込まれてセシリアの肩が跳ねた。

手入れの行き届いた金髪が揺れて顔が上げられれば、そのサファイアの様な瞳が瞬き驚愕に染め上げられる。

「つ、繫、さん……………」

「お疲れ様、セシリアさん」

少し前の邂逅から、互いに名前で呼び合うようになった繫とセシリアの二人。

この一週間、彼女だけがセシリアの側にいた。因みに、シスコンの姉や対戦相手であった彼などは少々渋い顔をしたのだが、それはそれ。二人は繫に甘いために、苦言を呈する事も無い。

そして今、繫は膝を抱えたセシリアを正面から抱きしめていた。

「つ、繫さん……………私……………」

「うん」

「く、悔しいんですの……………！腹が立って、腹が立って……………！仕方ありませんわ……………！」

「うん」

「勝って、貴女に……………！」

言葉が紡げたのは、そこまでだった。

悔しくて、悲しくて、情けなくて。どうして良いのか分からなくなったセシリア

は、繋の背に手を回すとその胸に縋りつくように泣き出してしまふ。

「よしよし、大丈夫だよセシリアさん。私は、どこにもいかないから、ね？」

聖母の様に微笑みを浮かべて、セシリアを優しく抱擁する繋は彼女の髪を指で梳きながら背を撫でる。

交流を持つ中で繋はセシリアの過去を聞く機会があった。そして、それ以来常に肩肘張って財産を狙う様々な輩と相對してきた事を聞いた。

その際には、話したセシリアが狼狽えるほどに涙を流し、目が腫れてしまい喉が枯れた事から姉に若干のお説教と心配をかけてしまったのだが、余談だ。

しばらくの間、嗚咽がピット内に響き、漸く止まる。

「スンッ………情けないところを、お見せしましたわね」

「ううん、そんな事ないよ」

顔を赤くして、若干視線をそらしながらも上目遣いとなるセシリアへ、繋は笑みを返す。

若干、制服が涙で濡れてしまったが彼女にとってはそんな事よりも、友人のメンタルケアの方が大切であった。

「……………どうして、こちらに？」

「え？」

「あちらには、貴女のお姉さんや……織斑一夏もいらっしやるのでは？」

「うん。でも、私はセシリアさんに会いたかったから」

「……………泣いてしまつて、説得力はありませんが同情なら私は——

——」

「え、違うよ？」

どうしても相手の裏を考えてしまう自分の事が嫌いになりそうだったセシリアだが、繋の否定に思わず頭が上がる。

目の前の彼女は優しい笑みを浮かべながらも、どこか気恥ずかしそうに頬を掻いていた。

「私、体が弱くつて中々友達が出来なかったの」

ほんの少しの寂しさを滲ませて彼女は語る。

「お姉ちゃんがずっと傍に居てくれたから、辛くは無かったよ？でも、心のどこかで思ってたんだ。このまま、私には友達が出来ないんじゃないかって」

「……………」

「うん、だからかな。こうして、一緒に居られる女の子の友達なんて初めてだったから……………」だから私は、ここに来たんだと思う」

「友達……………」

言葉に出せば、すんなりとそれらは飲み込めた。

同情でも憐憫でもなく、友情からの心配というのは存外心地よいもの。

「私と、繋さんは友達、ですね？」

「うん。嫌、かな？」

「とんでもないですわ！わ、私も貴女とその……………」と、友達になりたいんですの……………」

「！セシリアさん！」

「きゃっ！ちょ、ちよっと、繋さん!？」

目を輝かせて抱き着いてきた繋を抱き留めたセシリアは、彼女の臀部に犬の尻尾を幻視した。それはもう、目一杯振られる元気な尻尾だ。

ついでに、姉にも負けず劣らずに豊満な胸が抱き着くことによってセシリアの体

で潰れる事により柔らかく形を変えて押し当てられていた。

（柔らか……温かい………い、いえ、私にそのような趣味は

「セシリアさん？」

「ひゃうん！ み、耳元でしゃべらないでくださいまし！………んっ、どうされま
したの？」

「ううん、困った顔してたから、その………迷惑、かなあって」

「…………ッ！ そんな事ありませんわ！」

眉尻を下げて、捨てられた子犬の様な哀愁を漂わせた繋に、最早セシリアの辛抱
堪らない。

抱き潰す勢いで抱き寄せてその胸元へと顔を埋めていた。

余談だが、この後。一夏のライバルが増えたことをここに記す。

姉として

剣を振るう。彼女、篠ノ之箒にとってそれは日常であり、人生であり、自身の証明に他ならなかった。

一振りすることに自身の中の何かが研ぎ澄まされていき鋭さを増していく。その感覚がたまらなく彼女は好きであった。

振るうのは木刀ではなく、竹刀だ。実戦を加味するのであれば、木刀の方が都合が良いのだが箒はあえて竹刀を振るっていた。

念頭にあるのは安全性。そして、彼女の最愛にして最上位に位置する大切な大切な妹である繋からの贈り物であるから。

本当ならば飾りたかった。だが、その気持ちは贈ってきた妹の残念そうな目に断念せざるを得なかったのだ。

道具というのは使われてこそ意味がある。

そんな目を向けられてしまえば、箒としても振るわざるを得ない。

そして、この竹刀。彼女の手によく馴染んだ。

重さ、重心、長さ等々、その全てが丁度いい。数時間連続で振るったとしても、その疲労は他の竹刀や木刀などを振るった時と比べて半分以下であった。

何より、

「お姉ちゃん」

「ああ、繫」

箒が竹刀を振るっていた道場の入口。既に部員がいないこの場には、二人しかない。

「あんまり無理しちゃダメだよ？ 倒れちゃうから」

「ああ、そうだな。だがな、繫。私としてはお前が倒れないか、の方が心配だぞ？」

「むっ、大丈夫だよ。私だってちょっとは強くなったもん」

「ふふっ、ああそうだったな。では、部屋に戻ろう」

「むう……………」

綺麗な女性と言えるほどに成長した繫であるが、頬を膨らませる今の彼女は少女のように幼い。

こんな面は、滅多に表には出さない——のだが、こと姉である箒の前では

話は別だ。

そんな幼い様子を見せる妹の姿に、内心で悶えながらしかし外面はキッチリ整えた箒は余裕の笑みを持って更衣室へと向かい、手品師もびっくりの早着替えを終えてすぐさま愛し子の下へ。

「さあ、戻ろう」

「……うん」

帰りを促す箒と不貞腐れた繋。

だが、二人はどちらともなく右手と左手をそれぞれ出してその手をつないでいた。昔からだ。箒が手を伸ばし、繋が手を伸ばし、二人が互いに手を伸ばして繋がれる手。

手を引くのが姉で、手を引かれるのが妹で。これは、この先何があっても変わらないものであった。

＊

篠ノ之箒という少女にとって、双子の妹は護るべきモノであり、同時に半身の様であり、愛の全てを注いでも足りないと言えるほどに愛しい存在であった。

IS 学園の学生寮。1025室は、そんな世界的にも重要人物になりうる姉妹の城である。

「……………んむう……………」

スヤスヤと穏やかな寢息を立てる彼女、繋の寝顔は実に穏やかだ。

そんな妹と同じ布団に収まった姉、箒はまだまだ朝としては早い時間に目を覚まし指通りの良い黒髪を撫でていた。

「ふふっ……………」

向かい合うように、抱き合うように眠る二人。見方によっては疚しさを感じさせるかもしれないが、これにはちゃんと理由がある。

繋は体が弱い。そして、就寝というのは代謝が下がり体の機能が落ちてしまう。休もうとしているのだから当然なのだが、彼女の場合は少しでも体が冷えてしまうと体調を悪くしてしまうのだ。

実家に居た時ならば、部屋その物を暖かくして眠ることが出来ていた。彼女の部

屋は長女の束直々に改造が施されており、床下暖房完備でその上で布団を敷いて寝れば冷える事は無かった。

だが、一家離散となってからそれほど時間をおかずに繋は体調を崩してしまう。原因は、眠っている際に体が冷えてしまったことにある。

姉である筈は焦った。このままでは、妹の体調は悪くなる一方であると。

そして、彼女はある事を思い出す。

生まれてこの方、筈は風邪の一つも引いたことが無い。それどころか、病気一つ、大怪我一つした事は無い。

これを利用しない手は無い。彼女はすぐさま行動に移し、その結果妹が寝冷えを起こす事も無くなり、徐々に体調も回復していった。

今では、恐らく一人で寝てもそこまで体調を壊さないであろうことは二人も分かっている。

ただ、この五年間で常に一緒に寝ていたという事実が癖として沁みついてしまった。それだけの事だ。

繋はこの寝方を気に入っているし、姉に甘えられるこの時間が大好きであった。

そしてそれは箒もまた、同じこと。

しかし、

「ああ……お前はどんどん綺麗になっていくな……………」

愛おし気に繋の髪を梳いて、頬を撫でる箒の表情は家族の愛情というよりも、異性に向ける好意の様な色が見て取れる。

親愛、ではなく恋愛。親しいゆえの愛情ではなく、恋しい気持ちからの愛情。いつからそんな気持ちを抱いていたのか、箒としても分からない。

あえて挙げるのなら、いつの間にか。

自分に向けてくる微笑みに胸が高鳴り、弱る姿を見て泣きそうになり――

誰かに優しい笑顔を見せる姿を見て、黒い感情が胸の内側を焼いた。

そう、箒の試練というのは何も繋を守るだけの意図ではない。

自分自身を納得させるだけの理由を持たせるための儀式でもあった。

箒は自覚している。自分の恋愛感情が歪み、禁忌に触れている事を。その上で、止めることが出来ない愛しさがある事を。

故にライバルへと試練と称して接触し、自分の愛を確かめるのだ。

十人が十人振り返るイケメンも、不良としての喧嘩の強さも、学年トップの頭の良さも、その全てが箒にとっては塵芥に他ならない。

彼女の基準は、何よりも妹に対する愛なのだから。強弱に関しても見るが、本当に好きならば諦めないだろうというのが彼女の持論。負けた程度で諦めるのなら、その程度と切り捨ててきた。

幼馴染の彼が心配していたが、そもそも彼ほどに繋の事を考えてひたむきに努力してきた者は他に居なかったのだ。

イケメンはその面を見れないものへと変えられ、不良はチームごと竹刀一本で叩き潰され、学年一位は挑んだが最後二度と学年一位を取る事は出来なかった。

一夏とて同じだ。剣道で挑むたびに叩き潰され、それでもはいつくばってでも前に進んできた。

彼の事を箒も認めている。認めているが、それを受け入れるかはまた別の事。

「……………私のこの心を知れば、お前は離れるだろうか？」

ぽつりと呟き、それはとても恐ろしい事だと箒は背を震わせる。

このか弱い妹が自身の側を離れて独り立ちする。そんな未来が、彼女にはとても

恐ろしかった。

只の妄想であろうとも、その胸の中にポツカリと穴が開いたような気になりどうしようもない虚無感が襲ってくるからだ。

傍に居てほしい愛しい妹^人。

愛しさが胸の中に溢れて――

「おねえ、ちゃん……………」

感情が振り切れそうであつた箒を現実に戻したのは舌つたらずな幼い声だった。

慌てて箒が前を見れば、そこには寝ぼけ眼でボーっと見返してくる繫が居る。

「ど、どうした？まだ起きる時間には早いだろう？」

「ん……………」

箒が問えども、繫は何も言わずに姉の豊満な胸の中に顔を埋めて猫のようにすり寄ってくるばかり。

ほとんど反射的に抱き寄せれば腕の中から見上げてきた。

「えへへ……………おねえちゃん、あつたかいねえ……………」

ふにやり、とそんな音が付きそうな笑みを浮かべて再び寝始める繋。

明らかに寝惚けている。寝惚けているが、今の筈にはそんな事は些事でしかない。

(私の妹がこんなにも可愛い三三)

起こさないようにしながらも、内心でお祭り騒ぎのカーニバルが巻き起こっている彼女は、それから起床時間ギリギリになるまで興奮冷めやらぬままに理性とのデスゲームを敢行する事となるのだった。

初めての――

クラス代表決定戦が行われて暫く。翌日に休日を臨むその日、

「繫さん」

「ん？なあに、セシリアさん」

セシリア・オルコットは新たな一步を踏み出すべく勝負をかけていた。

「明日、御暇でしょうか？」

「え？……うん、特に用事はないよ？」

「でしたら、その………わ、私とお出かけしてはいけないうか？」

「「!？」」

何の事は無い遊びへのお誘い。しかし、ある二人にとってはその限りではなかった。

一人は、実の妹に対するシスコンを拗らせ捲っている^{セコム}箒。もう一人は数年単位で片思いが最早拗れそうなほどに募らせている少年。

動こうとしたのは実姉。これ幸いと席の近さを活用して割り込もうと口を開き、

「うん、良いよ。どこに行くの？」

その前に、実妹の言葉によって遮られてしまった。

まさしく絶句と言う外ない二人であるが、当人である繋からすれば内心で結構舞い上がっているというか、興奮していたりする。

病弱な彼女だ。これまで、友達との買い物などした事は無いし、第一誘われたことも無かった。

であるから、落ち着いたように見せつつもその瞳は常にならない程にキラキラと輝き、そわそわとその体は左右に小さく揺れていた。

本人は気づいていない。だが、その周りで見ていたものは気が付いていた。

ほっこりとする者や、微笑ましいと見守る者など様々なのだが中には、

「「ンッ！」」

“愛”が溢れそうな者たちも、居たりする。

*

「♪」

鼻歌を歌いながら、繫は自室において私服を選んでいた。

季節的にも風が吹けば寒く成れども、基本的には温暖。日の下に出ていれば、若干の汗がにじむ程度の気温は出る事だろう。

とすると、体の弱い彼女は温度調整がしやすい格好を選ぶのがベスト。

「繫」

「なあに、お姉ちゃん」

「いや、その……………」

妹の一人ファッションショーを見ていた筈は、気まずそうに言い淀む。

彼女が憂うのはこれまでの事。

籠の鳥として閉じ込め続けた事に対する負い目であった。

理由はある。誰よりもか弱かった妹を守りたかったのだ。だからこそ、全ての善意も悪意も弾いてきた。

しかしながら今思えば、自分もまた誰かに頼ればよかったのではないだろうかと思うのだ。少なくとも、善意に関しては許容してしかるべきであったはず。

黙り込んでしまった姉に、繫は決めた私服をしわにならない様に一式ハンガーにかけて戻すと、さっさと寝間着に着替えて、いつも眠るベッドへと向かった。

そして、

「お姉……………ちゃん！」

「むっ!? つ、繫っ!？」

流れるような動作で、ベッドの掛け布団を退かしてその上に箒を押し倒すではないか。そのままいそいそと布団を自分たちを覆うように被る。

目を白黒させる箒は、困惑した目を胸元に抱き着きすり寄り寄る繫へと向けるしかない。

「——大丈夫だよ、お姉ちゃん」

姉の視線を感じ取ったのか、小さくしかし耳に確りと届く声で繫はそう呟く。

「お姉ちゃんは、私の事を考えてくれてるって分かってるから。感謝してるし、嬉しいもん」

「……………ッ」

「むしろ、私がお姉ちゃんの時間を浪費しちゃって申し訳ないな、って思うんだ…

……ごめんね、お姉ちゃん」

「そんな事は無い!!」

謝る繋を、箒は力強く抱きしめる。

「お前は私の、大切な、大切な、妹なんだ！迷惑だなんて思っていない！お前が大切だから………！」

誰よりも大切な己の半身。失いたくないと思いつつも、同時に彼女が一人で何かを成す様を最も近くで見届けたいと思う、そんな二つの感情が入り混じり、箒の目より一筋の涙として零れ落ちていた。

そんな姉を、繋は抱き返す。互いが互いに己の存在を刻みつけるようにして。

＊

何の変哲もない休日。

その日もまたいつもと変わらず、待ちゆく人々は休息であったり、はたまた課題や仕事に追われながらもそんな時間を過ごしていた。

「楽しそうだね、セシリアさん」

「ふふっ、勿論ですわ。貴女とお出かけが出来るんですもの」

道行く人々が老若男女問わずに振り返りそうな美少女二人も、またこの日を謳歌している。

手入れの行き届いた金髪を春風の中で揺らし、淡い色合いのワンピースに白のブラウスを合わせたセシリアと、そんな彼女と手をつなぐデニム生地の上着に、シャツ、ひざ丈のスカートを穿いた繋の二人は、通りの視線を一身に集めていた。

中には、そんな彼女たちに下心から声を掛けようとする不埒者が居なくも無いのだが、

「.....」

ストーカー、もといセコムによってその尽くが撃滅されている。

そんな後ろの事など知る由もなく、二人が向かうのは大型複合商業施設であるレゾナンス。

未だに地理に疎いセシリアと、長く歩き回り過ぎれば体調を崩しかねない繋であるからこそ、室内で尚且つ様々なモノが見れるこの場所を選んでいた。

「これなんてどうでしょうか？」

「よく似合ってるよ、セシリアさん！かわいい！」

「そ、そうでしょうか？」（貴女のほうが何倍も可愛いですわ、繫さん！）

己に宛がった服を戻しながら、セシリアは内心でそう叫ぶ。私の友達がこんなに可愛い！と。

一方で、繫もまた服へと手を伸ばしていた。ただ、その表情は少し残念そうであり、セシリアはすぐにその変化に気が付く。

「ど、どうなさったんですの、繫さん？」

「えっと……この服可愛いな、って思ったんだけど………その」

「白のワンピースですね……ええ、繫さんによくお似合いになると思います」

「そ、そうかな？……えへへ………でも………」

ハニカム繫が見せるのは、服の値段、ではなくサイズの方。

「私って、ふ、太ってるから……」

それは、一部の人にとってはある種の絶望的な、しかし本人は本気の悩み。因みに、ワンピースのサイズが合わないのは一部分のみであるここに記す。

示された服のサイズと、それから繫の主張の激しい部分を見比べたセシリアもまた、その頬に赤みがさす。

成程、と。彼女の興味の示したワンピースはどちらかというと通常体系、もしくはスレンダーな女性向けのもの。一方で、繫自身の体系はスレンダーというよりはグラマラス。出るところは出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる、世の女性陣が羨むようなプロポーションを誇っていた。

ただ、そんな肢体を持つ当人は、自分の体型を正確に認識していないのだ。

「繫さん」

「ん？ なあに？」

「貴女は綺麗です、私が保証いたしますわ」

「……ふえ？」

「ですので、そう自分を卑下なさらないでくださいまし」

言いながら、セシリアは繫の両手を取りその目をまっすぐに見つめる。

彼女にとって篠ノ之繫という少女は、光そのものであり、同時に救いの神でもあり、大切な友人であると同時に、蓋をする気持ちに向ける相手でもある。

そんな彼女が表情を曇らせる姿など、セシリアは見たくはない。故に、その行動には一切の邪な気持ちなどはないし、その言葉にも裏はない。

「あうう………え、えっと、ありがと、セシリアさん……」

まっすぐに見つめてくるサファイアの瞳から赤い顔をそむける繋には、詰まりながらもそう返すことしかできない。

真っすぐな好意というのは、言う方もそうだが言われる側も照れるもの。

繋とてその例に漏れることはない。それも、生まれて初めての同性の友達となれば、その喜びは一人であるというもの。

握られた手を握り返す、繋。一方でセシリアも一種のハイな状態から降りてきて自分の状況を認識し、そして耳を赤くする。

（あ、ああ手……！手え！や、やわからか……あ、いい匂いが……！）

内心の語彙力が完全に溶け切っていた。どこぞの限界オタクもかくやといわんばかりの早口で連ね、体温も高くなる。

しかし、その手を振り払う事だけは絶対にしなかった。出来るはずもなかった。天井からスポットライトが降り注ぎ、彼女らの周りには百合の花が咲き誇り、そ

の花弁が風に舞う幻覚すら見せるそんな光景。

((甘い……………))

店員と客の内心が一致し、ごく一部では砂糖を吐きそうになる。

ついでに、スト^箒ーカ^とーが飛び出しそうになるのを互いが互いに妨害することで抑

制しあっていたことをここに記す。

やって来たあの子

肌触りの良い艶のある髪に櫛を通し、高い位置でリボンで纏めればいつもの彼女。

「できたよ、お姉ちゃん」

「ああ、ありがとう繋。そら、代わろう。今度は私が髪を梳いてやる」

「うん」

いつもの朝の時間。ドレッサーの前に自分と入れ替わるようにして座った繋のつむじを見下ろし箒は櫛を手にとった。

長く伸ばしている箒と違って、繋はショートカットが基本だ。双子を見分けるというのもあるが、一番はひ弱な妹を慮ってのこと。

髪が長ければ、それだけ乾かす時間がかかってしまう。ついでに、手間も。

場合によっては、この手間を疎かにして風邪をひいてしまいかねないのが篠ノ之繋という少女だった。

絹のような指通り。箒もそうだがこの姉妹、頭のとっぺんから毛先に向けて手櫛を通して一切引っかかることなく梳かす事ができる。

手入れの賜物か、あるいは血筋の影響か。

「……ふふっ」

「む？どうした、繫」

「んーん、何でもないよ」

突然微笑む妹に首をかしげながらも、箒は手入れの行き届いた髪へと櫛を通していく。

繫は、この時間が好きだった。いや、彼女の嫌いなものを挙げる方が難しいのだが、しかし好きなものの一つとして繫は姉妹のこうした触れ合いが好きだった。

跳ねも引っかけりも無く梳き終えた髪を、箒は名残惜し気に撫でる。

ショートカットではあるが、その指通りは高級な絹にも勝る、と言うのは肉親シスコンの欲目であるだろうか。

「お姉ちゃん？」

「……」

妹の疑問の声が聞こえるが、箒は何も答えない。

するりと自然な動きで、彼女は妹の頭を胸に抱くように腕を回して、その天辺に

頬を乗せた。

自然と後ろから抱きしめるような格好になったが、繋がそんな姉を振り払うような事はしない。寧ろ、嬉しそうにその表情を緩めて、前に回された姉の腕に頬ずりをする始末だ。

朝の姉妹のやり取り、にしては距離が近いかもしれないが数年間二人には互いしか居なかったのだから、距離感がバグってしまうのは無理からぬことだった。いつもの朝の時間は、こうして過ぎていく。

＊

「ねえ、聞いた？隣のクラスに転校生が来たんだって」

朝のHR前の余暇時間。一年生の教室が入ってフロアでは、そんな噂話で持ち切りだった。

周りでそんな風に話されれば、自然と耳にも入るといふもの。

「転校生だって、お姉ちゃん。どんな人かな」

「さて、な。随分と微妙な時期に来たものだとは思うが」

「繋さんも気になりますの？」

「うーん。どう、かな。隣のクラスだし、関わらないかな、と思うから」

クラスに馴染めていない訳ではないのだから、繋がり外に別の繋がりを求める理由はない。無いのだが、しかし姉シスコンとそれから英国ホ淑女字にとっては安堵の息を吐き出すしかない。

そんな二人をライバルとするのは、唯一の男性操縦者という訳で。

「何の話だ？」

「隣のクラスの転校性の話ですわ。ですが、一夏さんにはそちらに意識を割いている暇はないのでは？」

「え？」

「近々、クラス代表戦があるだろう？お前は、一組の代表なんだ。無様な真似はするなよ？」

「うぐっ……じゃ、じゃあ今からセシリアが代表に……」

「既に、一夏さんに決まっていますもの。今更の変更など出来ませんわ。もともと、仮に言い出しても織斑先生がお許しになるとは思えませんが」

セシリアにそこまで言われれば、一夏も引き下がるしかない。思い人繁の前でカッコつけたい男の子心というものもあるのだが、同時に無様を晒したくないという見栄もある。

自然と視線を集める一団。周りからも声が飛ぶ。

「大丈夫だよ、織斑くん！」

「そうそう。専用機を持つてるのって、このクラスと四組だけらしいし」

「——その情報、古いよ」

希望的観測が多分に含まれた言葉を遮ったのは、更に別の声。

視線が集まった先は、この教室の出入り口の一つだった。

肩の露出した改造制服に、ツインテール。勝気な雰囲気のある顔立ちに、不敵に笑う口元に除く八重歯が活発さを表している。

そして、一組の面々が首を傾げる中で、一人だけ彼女を知る者が居た。

「鈴？お前、鈴か？」

「ふふん、久しぶりね一夏」

目を丸くする一夏に、鳳鈴音は胸を張って勝気な笑顔を浮かべる。

「懐かしいな……中二の頃だから、丸一年会わなかった、か？」

「ま、それ位ね。それにしても、アンタも変わらないわね……相変わらず、女の子ばっかりだし」

「？なんだ？」

「べっつにー」

若干気に入らないのか、そんな雰囲気を滲ませる鈴音。彼女が見るのは、一夏の周りの少女たちの事だった。

そしてこの反応は、箒とセシリアにとって僥倖と言わざるを得ない。

成程、確かに織斑一夏という少年はハイスペックなのだろう。イケメンで性格も一本気、家事全般が得意でその上付き合えたのなら浮気の心配はほとんどしなくて良い。時折寒いギャグを考えたりするが、ソレはソレ。ちょっとした欠点として許容すれば気にもならないだろう。

だがしかし、彼女らにとって、カッコイイと言うのはセールスポイントにならないのだ。性格の良さに関しても。

「それより一夏。あ、あの約束、覚えてるかしら？」

「約束って——」

「——まずは、教室に戻るところからだ。馬鹿ども」

「あいたっ!？」

乙女の顔をしていた鈴音であつたが、その脳天に軽い音を立てて出席簿が振り落とされる。

慌てて振り返れば、疲れた顔の千冬が。

目の前で鈴音が叩かれれば自然と一夏の視界にも、姉鬼の姿が入るというもので。こちらもあわてて周りを見れば、箒も繫もセシリアも野次馬となっていたクラスメイトも席についているではないか。

裏切者！と思わないでもないが、ちゃんと裏がある。少なくとも、繫は二人に退避を促そうとしたのだ。したのだが、その前に箒を筆頭とした周りに手を引かれて手が届かなかった。

小気味いい音が、朝の教室に木霊する。

＊

授業を乗り切ったお昼休み。IS学園も例に漏れず多くの生徒によって食堂が込み合う時間帯だ。

運よく空いていた広い席で、箒と繫は並んで座り、繫の対面に来るようセシリアが席についてた。

「繫はそれだけで良いのか？」

「うん。あんまり食べると、気持ち悪くなっちゃうから」

「繫さんは、食が細いですからね……これも、今後の課題、という訳ですわ」

「で、でも、昔よりは食べられるんだよ？」

「だからといって、かけうどん一杯は少ないだろう」

苦言を呈すのも相手を思つての事。しょんぼりとしながら、繋は白い麵をちびちびと啜っていく。因みに、箸は唐揚げ定食。セシリアは箸に薦められたさば味噌煮定食を食べている。

どちらも、素うどん一杯よりは量が多い。せめて天かすでも載っていればたぬきうどんになるのだが、繋の場合天かすを食べ過ぎると油っぽ過ぎて気分を悪くしてしまう。

もそもそ食べる繋に、しかし箸はただ甘やかすだけではない。

「ほら、繋」

「なあに？」

「あーん、だ」

一口大の唐揚げを更に切り分けて小さくした切れ端を、箸は繋へと差し出してくる。

名目としては、食の細い妹を思つての行動。その本題は、合法的なアーン。

セシリアに、電流走る。この姉、実に策士である。セシリアも器用に箸を使って

はいるものの、それでも崩れやすい魚の身と言うのはアーンしにくい。ついでに、席も対面であるためより難しい。

その一方で、繫と言えば一瞬キョトンとするものの、直ぐに差し出された箸へとパクついた。

「むぐむぐ……ん、美味しいね」

「そうだろう？もう一口、どうだ？」

「……あー」

雛鳥のように口を開ける繫に、箸は微笑みながら再び唐揚げの切れ端を放り込んでいく。その最中に、僅かにセシリアへと勝ち誇るような表情を浮かべるあたり、故意犯だ。

明日こそは、とセシリアが目炎を宿していれば、来客が。

「あつ、繫、箸にセシリアも。この席、空いてるか？」

「む？ああ、好きにすると良い」

「私も構いませんわ」

「ん……んぐ、どうぞ」

二人ほどそっけなかったが、一夏としては繋が目を見てはにかんでくれるだけで十分。

少々カオスな昼食は、もう少し続く。

病弱な末妹

著者 貧弱弱者

発行日 2022 年 2 月 1 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/185698/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
